射日光を受けぬこと等の環境の相異に基く生態型と思われる。

4. **フジサンギンゴケモドキ** 本種は高木典雄氏が富士山頂附近で採集された萠蓋体のみの標品に基いて立てられたものである。広島大学の学生横川広美君が八ヶ岳頂上附近の岩隙からとつて筆者に贈られた標品は若い造胞体をつけていた。これに基いて苞葉と造胞体との記載を新しく附加する。然し齒が観察できないので，高木氏ののべられた *Anomobryum* に属さしめることへの疑問は一応保留する。

5. **キイウリゴケ**（新品種） 広島大学の鈴木兵二及び安藤久次両氏からいただいた紀伊，大和産のものは植物体が非常に大きく，葉の鋸齒がよく発達し造胞体を長く原形のまま保持する性質を有する。原記載には齒の記載なく又基準標本に近い九州産のもの（野口 No. ?——越智 No. 2542; 野口 No. ?——越智 No. 2541）も本品種とその採集時期が似ていても既に造胞体は著しく損われている。之等の点から考えると本品種と基準種とは熟季も異るかもしれない。亜種或は変種に昇格すべきものかも知れないが，現在の所大きさの相異と鋸齒以外には殆ど相異を認めないので一応品種として取扱うことにする。従来齒の記載がなかつたので新しく附加する。

6. **ツクシハリガネゴケ** 本種は従来四国九州のみから知られていたが先年堀川教授が本州新産として奈良県と広島県から産することを報告された。筆者の鳥取県からの報告によつてその分布域は更に北に拡大される。

○イトシノブゴケの産地について（水島うらら） Urara MIZUSHIMA: On the locality of *Thidium micropteris* Besch.

本誌 28 巻 6 月号 189 頁に樋口氏がイトシノブゴケが日本フロラに再登場したと云う事を書いて居られる。元来イトシノブゴケは M. É. Bescherelle によつて Annales des Sciences Naturelles, Sér. 7 Botanique, Tome 17, p. 367 (1893) に発表された種類であり，而も日本産の標本に基いて記載されたものである。それは同書 368 頁に明かな如く Faurie の採集した 5 標本，即ち北海道札幌 (no. 177)，三本木 (no. 1499)，小湊 (no. 50)，青森近郊 (no. 199 及び 205) である。上記産地の中三本木は現在の青森県上北郡三本木町，小湊は東津軽郡小湊町を示す。それ故イトシノブゴケの福島県産を報ぜられたのは貴重な記録ではあるが，「邦内に産せざる如し」という櫻井先生の報告及び樋口氏の引用は意味がないことになる。

尚 Bescherelle は本種を *Thuidjum bipinnatulum* Mitt. と比較して，莖葉は半円形で縁が平坦であり短鋭尖頭，花葉は基部から尖端まで有齒牙，蒴はより短き倒卵形で水平なるにより異ると書いては居るが，小枝のパピラには記文と共に何等言及して居ない。然し記文中に "……ramulis tenuibus minutissimis paraphyllis brevissimis simplicibus obtectis." とあるのは，或はパピラのことかも知れぬが筆者は Faurie の標本未検なので何とも言へない。